

大学生の友人関係における「自己表明」と 「他者の表明を望む気持ち」の心理的要因

川上奈都希*・兒玉憲一*

Psychological factors related to self-expressions and expectations of others' expressions
in university students' friendship

Natsuki Kawakami* Kenichi Kodama*

An earlier study investigating factors related to junior and senior high school students' self-expressions and expectations of others' expressions showed that “considerations of others' feelings” was negatively related to “expressions of complaints / demands” (Shibahashi, 2004). The present study investigated factors related to university students' self-expressions and expectations of others' expressions. University students ($N=269$) completed questionnaires. The results of multiple regression analysis showed the following: (1) “considerations of others' feelings” was negatively related to “expressions of opinion”, “expressions of complaints / demands” and “refusals of friends' request”; (2) “feelings of secure with friends” was related positively to all subscales of self-expressions among women; (3) “considerations of others' feelings” and “positive senses toward frankness” were positively related to “expectations of complaints / warnings from others” among men, while “desires to control” was negatively related to “expectations of complaints / warnings from others” among women. These results show that psychological factors related to university students' self-expressions and expectations of others' expressions are different from junior and senior high school students' and there are sex differences.

Keywords : self-expressions, expectations of others' expressions, friendship

問題と目的

アサーションの概念

アサーション (Assertion) とは、自他尊重に基づく自己表現のあり方を指す概念である (平木,

*広島大学大学院教育学研究科 (Graduate School of Education, Hiroshima University)

1993)。他者の権利を守りつつ、率直に自己表現することは、自分らしさを適切に出していくことであり、異なる考えや感情を持つ人々が歩み寄るために必要な社会的スキルである。日本語では、主張性、主張的行動、自己主張などと呼ばれることが多いが、主張という言葉には一方的に自分の要求や権利だけを通そうとするというニュアンスが含まれるため、現時点では適した訳語がないという状況である(柴橋, 1998)。平木(1993)は訳語を使用せず、「自分の気持ち、考え、信念などを正直に、率直に、その場にふさわしい方法で表現し、そして相手と同じように発言することを奨励しようとする」と定義している。この定義は、自己表現の側面だけではなく、他者の発言にどの程度向きあおうとしているのかという受け手の側面も重要な要素として述べている点に特徴がある。本研究では、この平木(1993)の定義に基づいてアサーションを捉えることとした。

青年期の友人関係におけるアサーションの意義

青年期は、幼児期から続く「自己発達」から「自己形成」へと転換し、自己の再構築がなされる時期である(溝上, 2008)。塩見(2000)は、自己形成をもたらすものとして「個性化」と「社会化」を挙げており、「個性化」とは独自性を持ち、自分を愛おしむ心を持つこと、「社会化」とは社会に合わせた自分を形成することと述べている。それらは、自分らしさを大切にしながら他者に打ち出し、自分とは異なる考えや感情を持つ他者を受け入れる体験を通して得られるものと考えられ、青年期でのアサーション能力の獲得は重要であると考えられる。また、榎本(1995)では、青年にとって友人関係は「自分づくりの機能」をもち、友人という鏡に互いを映し出しながら自分を見つめ、他者を理解する様々な経験を重ねていくと述べられている。親から心理的に自立する時期にあたる青年期では、友人関係が自己形成の場として機能していると言える。しかし、近年、友人関係の希薄化が指摘されている。保坂(1996)は、異質性を認め合いながら共にいることができる友人関係、peer-groupの形成が困難となっている背景として、心理的に未成熟な青年達は、他者との違いを言うこと、あるいは言われることは攻撃と同じと捉えてしまうことを挙げており、心理的自立に伴う自己表現の問題があると指摘している。以上より、青年の友人関係におけるアサーションを明らかにすることは、青年の自己形成という観点に重要な知見を示唆すると考えられる。

「自己表明」および「他者の表明を望む気持ち」に関する研究

柴橋(2001)は、平木(1993)の定義に基づいて、アサーションを「自己表明」と「他者の表明を望む気持ち」の2側面から捉え、それぞれを測定する尺度を作成している。さらに、中・高校生の同性友人関係におけるアサーションを性別・学校段階別に検討した結果、男子は女子よりも「不満・要求の表明」を多く行い、女子は男子よりも「限界・喜びの表明」を多く行うこと、女子は男子よりも他者の表明を望む気持ちが全般的に高いことが示されている。また、柴橋(2004)は、中・高校生の同性友人関係におけるアサーションとその心理的要因との関連を性別・学校段階別に検討している。その結果、①全体を通して、アサーションには「率直さへの肯定感」が深く関与している、②全体を通して、「スキル不安」は他者の表明を望む気持ちと関連が見られない、③「不満・要求の表明」の背景に、女子では「配慮・熟慮」、男子では「支配欲求」があるという結果が得られている。

本研究の目的

中・高校生を対象としたアサーションの心理的背景に関する研究は柴橋(2004)の他にもいくつ

か見られるが、大学生を対象としたものは見当たらない。そこで本研究では、大学生の同性友人関係におけるアサーションに心理的要因はどうか関連しているかを検討することを第一の目的とする。

また、Kolotokin (1980) によると、アサーションは主張相手によって難しさが異なるという。柴橋 (2001) においても、主張相手に関する問題点が指摘されており、友人関係一般について尋ねたため、相手との親しさに幅があり、主張相手を親友と限定した場合、異なる結果が得られるかもしれないと述べている。しかし、主張相手を親友とした場合の研究は見当たらない。友人の質がアサーションにどう影響しているかを検討した研究は少なく、その中の1つである新見・松尾・前田 (2004) では、友人が同性か異性かによって大学生のアサーションが異なることが示されている。この結果は、友人の質がアサーションに影響を及ぼすことを示唆するものと言える。そこで本研究では、大学生の同性友人関係におけるアサーションが主張相手 (親友・友人) によって異なるか否かを検討することを第二の目的とする。なお、柴橋 (2001) の相手との親しさに幅があるという指摘を踏まえ、親友と友人の違いは親密度の度合いとし、親友は友人に比べて親密度がより高いとした。最後に、柴橋 (2001)、柴橋 (2004) にならい、本研究においてもアサーションを「自己表明」と「他者の表明を望む気持ち」の2側面から捉えることとした。

方法

調査対象者 4年制大学の大学生 297名 (男性 133名, 女性 164名) を調査対象者とし、主張相手として親友を想定させる群 (以下、親友群) に 148名 (男性 65名, 女性 83名) を、主張相手として友人を想定させる群 (以下、友人群) に 149名 (男性 68名, 女性 81名) を割り付けた。

質問紙の構成 ①自己表明尺度：柴橋 (2001) が作成した自己表明尺度を使用した。この尺度は、「限界・喜びの表明」(8項目)、「意見の表明」(7項目)、「不満・要求の表明」(6項目)、「断りの表明」(5項目) の4つの下位尺度、計 26項目で構成されている。主張相手を想定させた上で、各項目内容が自分にどのくらいあてはまるかについて、4段階で評定させた (4：とてもあてはまる, 3：ややあてはまる, 2：ややあてはまらない, 1：全くあてはまらない)。

②他者の表明を望む気持ち尺度：柴橋 (2001) が作成した他者の表明を望む気持ち尺度を使用した。この尺度は、「相談・依頼を望む気持ち」(5項目)、「率直な断りを望む気持ち」(4項目)、「率直な抗議・注意を望む気持ち」(5項目)、「独自の意見の表明を望む気持ち」(4項目) の4つの下位尺度、計 18項目で構成されている。主張相手を想定させた上で、各項目内容が自分にどのくらいあてはまるかについて、4段階で評定させた (4：とてもあてはまる, 3：ややあてはまる, 2：ややあてはまらない, 1：全くあてはまらない)。

③アサーションの心理的要因尺度：柴橋 (2004) が作成したアサーションの心理的要因尺度を使用した。この尺度は、「安心感」(8項目)、「配慮・熟慮」(6項目)、「率直さへの肯定感」(5項目)、「スキル不安」(3項目)、「支配欲求」(3項目) の5つの下位尺度、計 25項目で構成されている。主張相手を想定させた上で、各項目内容が自分にどのくらいあてはまるかについて、6段階で評定させた (6：とてもあてはまる, 5：あてはまる, 4：ややあてはまる, 3：ややあてはまらない, 2：あてはまらない, 1：全くあてはまらない)。

④フェイス項目 性別, 年齢, 学年について尋ねた。

質問紙は, 群によって異なる 2 種類 (親友版・友人版) を作成した。親友版では「現在, あなたが最も親しくしている同性の友人をひとり思い浮かべてください」, 友人版では「現在における, あなたの同性の友人を思い浮かべてください」と, 想定する主張相手が異なるよう教示文を設定した。なお, 親友版では, そのまま使用すると表現が教示文に沿わない 2 項目が自己表明尺度のなかにあったため, 内容を損なわずに教示文に沿うよう語句の一部を変更した。

調査時期・手続き 2010 年 11 月上旬に, 集団による無記名自記式質問紙調査を実施した。講義時間の一部を利用し, 親友群には親友版の質問紙を, 友人群には友人版の質問紙を配布, 回収した。

結果

分析対象者

調査対象者 297 名のうち, 回答に不備があった 28 名を除いた 269 名 (男性 118 名, 女性 151 名) を分析対象者とした (有効回答率 90.6%)。平均年齢は 20.81 歳 ($SD=0.72$) であった。

各尺度得点の記述統計量および信頼性の検討

各尺度の尺度得点について, 分析対象者全体および主張相手・男女別の平均値, 標準偏差を算出した (Table 1)。各分析対象者の尺度得点は, 尺度の全項目への評定値を単純加算し, 全項目数で除すことにより算出した。自己表明尺度について尺度得点の信頼性分析をしたところ, Cronbach の信頼性係数は $\alpha=.81$ であった。また, 他者の表明を望む気持ち尺度について尺度得点の信頼性分析をしたところ, Cronbach の信頼性係数は $\alpha=.94$ であった。両尺度とも十分な信頼性が確認されたため, 以後の分析に用いることとした。最後に, アサーションの心理的要因尺度は尺度全体ではなく下位尺度で使用するため, 尺度得点は算出しなかった。

Table 1
分析対象者全体および主張相手・男女別の尺度得点の平均値(SD)

	全体($N=269$)	親友群		友人群	
		男性($N=58$)	女性($N=75$)	男性($N=60$)	女性($N=76$)
自己表明尺度	2.87(0.32)	2.81(0.34)	2.91(0.32)	2.85(0.32)	2.88(0.31)
他者の表明を望む気持ち尺度	3.38(0.46)	3.25(0.50)	3.49(0.41)	3.24(0.49)	3.47(0.39)

各下位尺度得点の記述統計量および信頼性, 因子的妥当性の検討

各尺度の下位尺度得点について, 分析対象者全体および主張相手・男女別の平均値, 標準偏差を算出した (Table 2)。各分析対象者の下位尺度得点は, 各下位尺度に含まれる項目への評定値を単純加算し, 項目数で除すことにより算出した。自己表明尺度の下位尺度について信頼性分析をしたところ, Cronbach の信頼性係数は「限界・喜びの表明」が $\alpha=.79$, 「意見の表明」が $\alpha=.74$, 「不満・要求の表明」が $\alpha=.66$, 「断りの表明」が $\alpha=.56$ であった。また, 確認的因子分析を実施したところ, $GFI=.786$, $AGFI=.747$, $RMSEA=.090$, $CFI=.599$ であった。次に, 他者の表明を望む気持ち尺度の下位尺度について信頼性分析をしたところ, Cronbach の信頼性係数は「相談・依頼を望む気持ち」が

$\alpha=.80$, 「率直な断りを望む気持ち」が $\alpha=.82$, 「率直な抗議・注意を望む気持ち」が $\alpha=.90$, 「独自の意見の表明を望む気持ち」が $\alpha=.80$ であった。また, 確認的因子分析を実施したところ, $GFI=.869$, $AGFI=.831$, $RMSEA=.096$, $CFI=.869$ であった。最後に, アサーションの心理的要因尺度の下位尺度について信頼性分析をしたところ, Cronbach の信頼性係数は「安心感」が $\alpha=.79$, 「配慮・熟慮」が $\alpha=.72$, 「率直さへの肯定感」が $\alpha=.77$, 「スキル不安」が $\alpha=.73$, 「支配欲求」が $\alpha=.63$ であった。また, 確認的因子分析を実施したところ, $GFI=.782$, $AGFI=.737$, $RMSEA=.089$, $CFI=.717$ であった。全尺度において, 各因子の内的一貫性および因子的妥当性がある程度認められたため, 全ての下位尺度を以後の分析に用いることとした。

Table 2
分析対象者全体および主張相手・男女別の下位尺度得点の平均値(SD)

	全体(N=269)	親友群		友人群	
		男性(N=58)	女性(N=75)	男性(N=60)	女性(N=76)
自己表明尺度					
限界・喜びの表明	3.13(0.50)	2.86(0.51)	3.27(0.42)	2.97(0.50)	3.31(0.45)
意見の表明	2.77(0.47)	2.85(0.54)	2.81(0.48)	2.78(0.44)	2.67(0.43)
不満・要求の表明	2.55(0.49)	2.64(0.51)	2.47(0.47)	2.69(0.48)	2.46(0.46)
断りの表明	2.96(0.47)	2.87(0.50)	3.03(0.40)	2.94(0.53)	2.98(0.47)
他者の表明を望む気持ち尺度					
相談・依頼を望む気持ち	3.30(0.54)	3.13(0.53)	3.45(0.49)	3.09(0.56)	3.44(0.49)
率直な断りを望む気持ち	3.44(0.52)	3.27(0.60)	3.56(0.42)	3.31(0.63)	3.57(0.40)
率直な抗議・注意を望む気持ち	3.42(0.64)	3.33(0.56)	3.49(0.48)	3.28(0.62)	3.43(0.51)
独自の意見の表明を望む気持ち	3.38(0.49)	3.28(0.52)	3.46(0.49)	3.30(0.49)	3.44(0.46)
アサーションの心理的要因尺度					
安心感	4.43(0.68)	4.31(0.68)	4.62(0.64)	4.16(0.69)	4.54(0.62)
配慮・熟慮	4.43(0.70)	4.23(0.71)	4.47(0.69)	4.26(0.75)	4.66(0.57)
率直さへの肯定感	4.76(0.70)	4.61(0.75)	4.82(0.69)	4.69(0.75)	4.89(0.61)
スキル不安	3.67(1.03)	3.43(0.99)	3.74(1.06)	3.64(0.99)	3.81(1.04)
支配欲求	2.39(0.84)	2.59(0.85)	2.15(0.80)	2.62(0.88)	2.28(0.75)

各尺度の性差および主張相手による差の検討

自己表明尺度 自己表明の性差および主張相手による差を検討するため、自己表明尺度の尺度得点および下位尺度得点について、2 (主張相手：親友，友人) × 2 (性別) の 2 要因分散分析を行った。分散分析の結果を Table 3 に示す。

尺度得点では、主張相手・性別いずれの主効果も有意ではなかった。「限界・喜びの表明」は、男性よりも女性が高かった ($F(1,265)=42.14, p<.001$)。「意見の表明」は、主張相手が友人よりも親友の方が高いという傾向が見られた ($F(1,265)=3.14, p<.10$)。「不満・要求の表明」は、女性よりも男性が高かった ($F(1,265)=11.67, p<.01$)。「断りの表明」は、男性よりも女性が高いという傾向が見られた ($F(1,265)=2.75, p<.10$)。なお、尺度得点および全ての下位尺度得点において、有意な交互作用は見られなかった。

これらの結果から、女性は男性よりも「限界・喜びの表明」「断りの表明」を多く行うこと、男性は女性よりも「不満・要求の表明」を多く行うことが示された。また、「意見の表明」は主張相手が友人よりも親友の場合に、多く行われる傾向があることが示唆された。

Table 3
自己表明尺度の分散分析結果

	性差		主張相手		交互作用	
	F値	高低差	F値	高低差	F値	高低差
限界・喜びの表明	42.14**	男性<女性	1.62	n.s.	0.35	n.s.
意見の表明	1.92	n.s.	3.14†	親友>友人	0.39	n.s.
不満・要求の表明	11.67**	男性>女性	0.15	n.s.	0.24	n.s.
断りの表明	2.75†	男性<女性	0.02	n.s.	1.19	n.s.
尺度全体	2.72	n.s.	0.00	n.s.	0.97	n.s.

† $p<.10$ ** $p<.01$

他者の表明を望む気持ち尺度 他者の表明を望む気持ちの性差および主張相手による差を検討するため、他者の表明を望む気持ち尺度の尺度得点および下位尺度得点について、2 (主張相手：親友，友人) × 2 (性別) の 2 要因分散分析を行った。分散分析の結果を Table 4 に示す。

尺度得点と下位尺度得点全てに性別の主効果が見られ、男性に比べて女性の方が高かった（「相談・依頼を望む気持ち」 $F(1,265)=27.83;p<.001$ ，「率直な断りを望む気持ち」 $F(1,265)=19.44;p<.001$ ，「率直な抗議・注意を望む気持ち」 $F(1,265)=6.16;p<.05$ ，「独自の意見の表明を望む気持ち」 $F(1,265)=7.05;p<.01$ ，尺度得点 $F(1,265)=19.52;p<.001$)。なお、尺度得点および下位尺度得点全てにおいて、主張相手の主効果および有意な交互作用は見られなかった。

これらの結果から、女性は男性よりも他者の表明を望む気持ちが全般的にも、各側面においても強いことが示された。

Table 4
 他者の表明を望む気持ち尺度の分散分析結果

	性差		主張相手		交互作用	
	F値	高低差	F値	高低差	F値	高低差
相談・依頼を望む気持ち	27.83**	男性<女性	0.12	n.s.	0.09	n.s.
率直な断りを望む気持ち	19.44**	男性<女性	0.19	n.s.	0.08	n.s.
率直な抗議・注意を望む気持ち	6.16*	男性<女性	1.51	n.s.	0.38	n.s.
独自の意見の表明を望む気持ち	7.05**	男性<女性	0.00	n.s.	0.10	n.s.
尺度全体	19.52**	男性<女性	0.25	n.s.	0.09	n.s.

* $p<.05$ ** $p<.01$

アサーションの心理的要因尺度 アサーションの心理的要因の性差および主張相手による差を検討するため、アサーションの心理的要因尺度の下位尺度得点について、2(主張相手：親友，友人)×2(性別)の2要因分散分析を行った。分散分析の結果をTable 5に示す。

下位尺度得点全てに、性別の主効果が見られた。「安心感」は、男性よりも女性が高かった($F(1,265)=18.50, p<.001$)。「配慮・熟慮」は、男性よりも女性が高かった($F(1,265)=14.63, p<.001$)。「率直さへの肯定感」は、男性よりも女性が高かった($F(1,265)=5.74, p<.05$)。「スキル不安」は、男性よりも女性が高いという傾向が見られた($F(1,265)=3.69, p<.10$)。「支配欲求」は、女性よりも男性が高かった($F(1,265)=15.09, p<.001$)。なお、全ての下位尺度において、主張相手の主効果および有意な交互作用は見られなかった。

これらの結果から、女性は男性よりも「安心感」「配慮・熟慮」「率直さへの肯定感」「スキル不安」が強く、男性は女性よりも「支配欲求」が強いことが示された。

Table 5
 アサーションの心理的要因尺度の分散分析結果

	性差		主張相手		交互作用	
	F値	高低差	F値	高低差	F値	高低差
安心感	18.50**	男性<女性	1.94	n.s.	0.22	n.s.
配慮・熟慮	14.63**	男性<女性	1.94	n.s.	0.91	n.s.
率直さへの肯定感	5.74*	男性<女性	0.68	n.s.	0.00	n.s.
スキル不安	3.69†	男性<女性	1.31	n.s.	0.36	n.s.
支配欲求	15.09**	男性>女性	0.72	n.s.	0.24	n.s.

† $p<.10$ * $p<.05$ ** $p<.01$

自己表明とアサーションの心理的要因との関連

アサーションの心理的要因が自己表明にどのように関連しているのかを検討するため、アサーションの心理的要因尺度の下位尺度を説明変数、自己表明尺度の下位尺度を基準変数とする重回帰分析(強制投入法)を実施した。分散分析の結果より、両尺度とも主張相手による差はほぼ見られず性差は認められたため、主張相手を込みにし、男女別に分析した。得られた標準偏回帰係数の値を Table 6 に示す。自己表明尺度の各下位尺度間相関は、男性では $r=.22\sim.55$ 、女性では $r=.24\sim.54$ であった。アサーションの心理的要因尺度の各下位尺度間相関は男性では $r=-.35\sim.65$ 、女性では $r=-.46\sim.59$ であった。

女性では「安心感」が自己表明尺度の全下位尺度と正の関連を示したが、男性ではこうした関連は見られなかった。次に、「配慮・熟慮」は、男女全ての「意見の表明」「不満・要求の表明」「断りの表明」の低さと関連していた。また、男性の「限界・喜びの表明」の高さと関連していた。次に、「率直さへの肯定感」は性別に関係なく、自己表明尺度のほぼ全ての下位尺度と正の関連を示していた。次に、「スキル不安」は、男女全ての「意見の表明」の低さと関連していた。さらに、女性の「不満・要求の表明」の低さとも関連している傾向が見られた。また、男性の「断りの表明」の高さと関連が見られた。最後に、「支配欲求」は女性の「不満・要求の表明」のみと正の関連を示していた。

Table 6
「自己表明」に関連する心理的要因の重回帰分析

		＜説明変数＞					R ²	定数
		安心感	配慮・熟慮	率直さへの肯定感	スキル不安	支配欲求		
＜基準変数＞								
限界・喜びの表明								
	男性	.19	.25*	.20†	-.13	-.04	.19**	1.28
	女性	.40**	.01	.30**	.02	.10	.33**	0.86
意見の表明								
	男性	.16	-.28**	.39**	-.18†	.03	.37**	2.20
	女性	.21*	-.13†	.35**	-.21*	-.02	.37**	1.63
不満・要求の表明								
	男性	.14	-.33**	.24*	-.07	.06	.20**	2.49
	女性	.26*	-.29**	.16†	-.15†	.17*	.25**	2.05
断りの表明								
	男性	.14	-.24*	.21†	.23*	-.11	.09**	2.27
	女性	.23*	-.17*	.12	.06	-.07	.09**	2.43

数値は標準偏回帰係数, R²:説明率, † $p<.10$ * $p<.05$ ** $p<.01$

他者の表明を望む気持ちとアサーションの心理的要因との関連

アサーションの心理的要因が他者の表明を望む気持ちにどのように関連しているのかを検討するため、アサーションの心理的要因尺度の下位尺度を説明変数、他者の表明を望む気持ち尺度の下位尺度を基準変数とする重回帰分析（強制投入法）を実施した。分散分析の結果より、両尺度とも主張相手による差が見られず性差が認められたため、主張相手を込みにし、男女別に分析した。得られた標準偏回帰係数の値を Table 7 に示す。他者の表明を望む気持ち尺度の各下位尺度間相関は男性では $r=.62\sim.88$ 、女性では $r=.54\sim.72$ であった。

「安心感」は、女性の「相談・依頼を望む気持ち」の高さのみと関連している傾向が見られた。次に、「配慮・熟慮」は男女全ての「相談・依頼を望む気持ち」「率直な断りを望む気持ち」と正の関連を示しており、男性の「率直な抗議・注意を望む気持ち」とも正の関連を示していた。次に、「率直さへの肯定感」は、男女ともに、ほぼ全ての下位尺度と正の関連を示していた。次に、「スキル不安」は性別を問わず、全ての下位尺度と関連は見られなかった。最後に、「支配欲求」は、女性の「率直な断りを望む気持ち」「率直な抗議・注意を望む気持ち」の低さと関連していた。

Table 7
「他者の表明を望む気持ち」に関連する心理的要因の重回帰分析

		<説明変数>					R ²	定数
		安心感	配慮・熟慮	率直さへの肯定感	スキル不安	支配欲求		
<基準変数>								
相談・依頼を望む気持ち								
男性	.05	.29**	.38**	.07	.11	.27**	0.41	
女性	.20†	.18*	.21*	.08	.01	.14**	1.24	
率直な断りを望む気持ち								
男性	.06	.34**	.33**	.10	-.05	.31**	0.49	
女性	.09	.16†	.33**	.01	-.14†	.20**	1.99	
率直な抗議・注意を望む気持ち								
男性	.04	.26**	.35**	.16	-.07	.28**	0.77	
女性	.13	.02	.12	.06	-.19*	.07**	2.43	
独自の意見の表明を望む気持ち								
男性	-.04	.07	.65**	.04	-.06	.41**	1.20	
女性	.15	.07	.38**	-.01	-.04	.23**	1.45	

数値は標準偏回帰係数, R²:説明率, † $p<.10$ * $p<.05$ ** $p<.01$

考察

主張相手によるアサーションおよび心理的要因の差について

主張相手による差が見られたのは自己表明尺度の「意見の表明」のみであり、友人よりも親友のほうが高い傾向が見られた。若者自身が親友をどう捉えているかについて、大学生を対象に面接調査を行っている岡林 (2005) によると、大学生は親友のことをありのままの自己表現ができる相手と捉えているという。質問項目を見てみると、「意見の表明」に含まれる項目は「友達と考え方が違うと思ったときでも話し合ったり議論しようとする」など、他3つの自己表明の各側面に比べて、自分らしさを打ち出そうとする側面が強いものであると考えられる。これらのことから、自分らしさを打ち出すという意味合いをより含む自己表明は、主張相手が友人の場合よりも親友の場合に行われやすい傾向がある可能性が示唆された。しかし、主張相手による差が他3側面の自己表明や他者の表明を望む気持ち、アサーションの心理的要因において見られなかったことを踏まえると、大学生の同性友人関係におけるアサーションおよびその心理的要因に、友人の質による差は明確には見られなかった。

性別によるアサーションおよび心理的要因の差について

自己表明尺度において性差が見られたのは、「限界・喜びの表明」、「不満・要求の表明」、「断りの表明」の3つであった。男性は女性よりも「不満・要求の表明」を、女性は男性よりも「限界・喜びの表明」を多く行うことが示された。この結果は、中学・高校生を対象とした柴橋 (2001) および大学生を対象とした新見他 (2004) と同様の結果であり、男子は女子よりも、友人には負けたくないという「ライバル意識」を強く感じ、女子は男子よりも、友人と自己開示や親密性を主とした活動を多く行うという特徴 (榎本, 1999) が反映された結果ではないかと考えられる。また、崔・新井 (1998) によると、友人からの言語的被害を受けて怒りを感じている場面で、女性に比べて男性は感情を制御しない傾向があるという。柴橋 (2001) および 新見他 (2004) と異なる点は、女性が男性よりも「断りの表明」を多く行う傾向があるという結果が得られたことである。柴橋 (2001) によると、女子では中学生よりも高校生が「断りの表明」を多く行うが、男子では学年による差はないという。このことから、大学生における「断りの表明」の性差は、女性では中学生よりも高校生が「断りの表明」を多く行うという学年差が見られるが、男性にはこのような変化が見られないことを反映している可能性が考えられる。

次に、他者の表明を望む気持ち尺度において性差が見られたのは、尺度全体と下位尺度全てであり、いずれも男性よりも女性が高かった。この結果は、柴橋 (2001) および新見他 (2004) の結果と一致するものであり、大学生においても、女性は男性に比べて友人が率直に自分の気持ち・考えを述べることを望んでいることが明らかになった。女子は男子よりも他者との関係を重視し (落合・佐藤, 1996) 、他者との関係形成・維持に努めようとする特徴を持つ。そのため、男性に比べて、女性は他者の気持ち・考えを知ることが重要視し、また、知りたいという気持ちが強いと考えられる。

最後に、アサーションの心理的要因尺度では全下位尺度において性差が見られた。女性は男性よりも「安心感」、「配慮・熟慮」、「率直さへの肯定感」、「スキル不安」が強く、男性は女性よりも「支配

欲求」が強いことが示された。この結果は柴橋 (2004) と同様の結果であった。大学生においても、女性は男性に比べて、率直であることは良いという気持ちや相手に対する安心感を強く抱きながらも、相手への気遣いや、言い方への不安があるなど、より複雑な思いを持ってアサーションをしていることが考えられる。また、女性に比べて男性は、自分の意見を無理に通そうとする傾向が強いことが示された。以上より、男子の友人関係は力・支配を重要視し、自立したつきあい方が多く、女子の友人関係はお互いを積極的に理解し合おうとするつきあい方が多いといった男女の友人関係の特徴 (和田, 1993 ; 落合・佐藤, 1996) が、アサーションの心理的要因にも深く反映されていると考えられる。また、榎本 (1999) によると、友人に対する感情的側面には男女差があり、男子は女子よりも友人に負けたくないという「ライバル意識」を、女子は男子よりも友人にどう思われているかという「不安・懸念」を強く感じているという。このことから、女性は「不安・懸念」から相手への配慮・気遣いが高いと推測される。

アサーションの心理的要因と「自己表明」および「他者の表明を望む気持ち」との関連について

全体的特徴 率直さへの肯定感、つまり自分の気持ちや考えを大切なものであると考え、それらを率直に他者に伝えることを肯定的に捉える価値観を持つ者は、率直に自己表明を行い、相手にも率直な自己表明をしてほしいと思っていることが明らかになった。これは中・高校生を対象とした柴橋 (2004) と同様の結果であり、大学生においても、「率直さへの肯定感」はアサーションの2側面を支える重要な要因であることが示された。

また、男女を通して友人に自分の意見が言えない、さらに、女性が友人に対して不快だという気持ちを言えない背景には、どのように伝えたらいいのかわからないという「スキル不安」が関連していた。これは、男性の「不満・要求の表明」とは関連が見られなかったことを除けば、柴橋 (2004) と同様の結果であった。このことから、大学生においても、特に女性では「スキル不安」は相手と相対峙する可能性がある自己表明の抑制要因であることが推察される。一方、「スキル不安」は他者の表明を望む気持ちとは関連していなかった。この結果も柴橋 (2004) と一致するものであった。「スキル不安」は言い方への不安を表すものであるため、自己表明のみと関連が見られたと推察される。

さらに、男女ともに、友人に対して意見を述べたり、友人の頼み・誘いを断ったり、友人に不満を伝えたりできない背景に「配慮・熟慮」も関連していた。柴橋 (2004) では、「配慮・熟慮」は「不満・要求の表明」の低さと関連していたが、本研究では「不満・要求の表明」の低さに加えて、「意見の表明」「断りの表明」の低さにも関連していた。このことから、中・高校生に比べて、大学生では、「配慮・熟慮」は相手と敵対する可能性のある自己表明の大きな抑制要因であると考えられ、より相手の立場や気持ちに配慮しながら自己表明を行っていると推測される。

最後に、男女ともに、「相談・依頼を望む気持ち」、「率直な断りを望む気持ち」に「配慮・熟慮」が関連していた。このことから、相手への気遣いが強い者ほど相手が困っているときは伝えてほしい、無理な頼みは断わってほしいと思っていることが明らかになった。

以上より、大学生の友人関係におけるアサーションとその心理的要因との関連は、中・高校生と共通する側面もあるが、異なる側面もあることが見出された。

性別による特徴 女性では全ての自己表明に「安心感」が正の関連を示していたが、男性ではこ

のような関連は見られなかった。このことから、友人に対する安心感・信頼感は、女性の自己表明を支える大切な要因であることが推測される。一方、男女ともに、「安心感」は他者の表明を望む気持ちとは関連がほぼ見られなかった。このことから、友人に対する安心感・信頼感は他者の表明を望む気持ちには結びつかない可能性がある。

次に、「率直な抗議・注意を望む気持ち」の背景として、男性では「配慮・熟慮」「率直さへの肯定感」が正の関連を、女性では「支配欲求」のみが負の関連を示した。また、女性では「率直な断りを望む気持ち」に「支配欲求」が負の関連を示していたが、男性ではこのような関連は見られなかった。さらに、女性では「不満・要求の表明」に「支配欲求」が正の関連を示していたが、男性ではこのような関連は見られなかった。このことから、大学生の女性では、「支配欲求」が相手と敵対する可能性がある自己表明および他者の表明を望む気持ちに影響を及ぼしていることが推測される。

以上より、大学生の友人関係におけるアサーションとその心理的要因との関連は男女によって異なる側面があることが見出された。

本研究の成果

本研究の主な成果をまとめると、これまで明らかにされていなかった高校生以降の同性友人関係におけるアサーションとその心理的要因との関連の詳細を明らかにした。大学生の同性友人関係における自己表明および他者の表明を望む気持ちに関連する心理的要因には中・高校生とは異なる側面があること、性差があることが示唆された。

また、大学生の同性の友人関係におけるアサーションおよびその心理的要因に、主張相手となる友人の質が及ぼす影響は明確にはならなかった。一方、性差は見られ、その背景には従来述べられてきた男女の友人関係の特徴が大きく反映されていると考えられる。

今後の課題

本研究では、調査対象者を親友群、友人群の2群に分け、それぞれ異なる教示文を提示することで主張相手による差を検討しようとした。しかし、その方法では調査対象者によって想定する「友人」と「親友」の定義が異なってしまう、ある対象者にとっては「友人」と想定される関係が、他の対象者では「親友」と想定されている可能性があり、群の統制ができなかったことが考えられる。また、友人群では、項目ごとに想定する友人を変え、ある項目に対しては親友を想定していたという可能性もあり、そのため主張相手による差が出なかったことが考えられる。今後、主張相手による差を検討していくには被験者内計画での調査実施など異なる手法が求められる。

引用文献

- 崔 京姫・新井邦二郎 (1998). ネガティブな感情表出の制御と友人関係の満足感および精神的健康との関係 教育心理学研究, 46, 432-441.
- 榎本博明 (1995). 友人関係の意義と破綻 馬場謙一(編) 現代のエスプリ第 330 号 学校臨床 至文堂 pp.55-64.
- 榎本淳子 (1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的变化 教育心理学研究, 47, 180-190.

- 平木典子 (1993). アサーション・トレーニング—さわやかな自己表現のために— 金子書房
- 保坂 亨 (1996). 児童期から思春期・青年期における友人関係の発達と「いじめ」 千葉大学教育実践研究, **3**, 1-9.
- Kolotokin, R.A. (1980). Situational specificity in the assessment of assertion: Consideration for the measurement of training and transfer. *Behavior Therapy*, **11**, 651-661.
- 溝上慎一 (2008). 第5章 自己発達から自己形成へ 溝上慎一(編著) 自己形成の心理学—他者の森をかけ抜けて自己になる— 世界思想社 pp.79-98.
- 新見直子・松尾沙織・前田健一 (2004). 大学生の友人関係における自己表明と他者の表明を望む気持ち 広島大学心理学研究, **4**, 139-149.
- 岡林春雄 (2005). 親友という他者：現代若者の人間関係 山梨大学教育実践学研究, **10**, 41-50.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあい方の発達の变化 教育心理学研究, **44**, 55-65.
- 柴橋祐子 (1998). 思春期の友人関係におけるアサーション能力育成の意義と主張性尺度研究の課題について カウンセリング研究, **31**, 19-26.
- 柴橋祐子 (2001). 青年期の友人関係における自己表明と他者の表明を望む気持ち 発達心理学研究, **12**, 123-134.
- 柴橋祐子 (2004). 青年期の友人関係における「自己表明」と「他者の表明を望む気持ち」の心理的要因 教育心理学研究, **52**, 12-23.
- 塩見邦雄 (2000). 社会性の形成と発達 塩見邦雄(編著) 社会性の心理学 ナカニシヤ出版 pp.3-20.
- 和田 実 (1993). 同性友人関係—その性および性別タイプにおける差異— 社会心理学研究, **8**, 67-75.